

Review

糖尿病治療における Shared Decision Making (SDM)

鹿児島大学糖尿病・内分泌内科

小木曾和磨, 西尾善彦

はじめに

Shared Decision Making (SDM) は「共同意思決定」と訳され、治療方針の決定のための医療者と患者間の協働のコミュニケーション・プロセスを意味する。本稿では SDM の概略と糖尿病治療における SDM について述べる。

治療の意思決定のプロセス

Charles らが 1999 年に治療の意思決定プロセスのモデルを提示した (表①)¹⁾。これによると、父権主義的な意思決定モデルでは、医師から患者への一方向性の情報の流れとなり、治療方針は医師が検討し決定することとなる。すなわち患者は病態を理解することなく、一方的に治療を受ける形になる。インフォームドモデルは治療の選択肢に関する情報を患者や家族に伝え、治療方針の決定は患者のみでおこなわれる。一見、患者が決定しており患者主体にもみえるが、意思決定プロセスにおいて情報提供以外の役割がない。一方、Shared Decision

Making (SDM, 共同意思決定) モデルでは、情報交換が医師と患者のあいだで双方向におこなわれる。医師は治療方法のリスクとベネフィット、とくに治療により患者が受ける可能性のある心理や社会的影響も含め、すべての情報を提供する必要がある。一方、患者側は疾患や治療に関する価値観、生活習慣、信念など、自身の考えを医師側に提供する。この SDM モデルは医師が方針を決定する父権主義的なモデルと患者が方針を決定するインフォームドモデルの中間に置かれているが、重要な点は治療の決定権を誰がとるのかではなく、両者が希望の治療について情報を共有し、同意を形成するステップを踏む過程にある。

わが国においても、父権主義的な医師患者関係から 1990 年代半ば頃より患者の主体化やインフォームド・コンセントの概念が普及し、さらに 2000 年代後半頃より患者中心のアプローチや SDM の概念が少しずつ認識されるようになった。

SDM の実践

治療方針決定のための SDM を具体的に実践する

表① 治療の意思決定モデル

		モデル		
ステージ		父権主義的	共有	インフォームドモデル
情報交換	流れ	一方向	双方向	一方向
	方向	医師→患者	医師↔患者	医師→患者
	タイプ	医学的	医学的, 個人的	医学的
審議		医師	医師と患者	患者
治療法の決定		医師	医師と患者	患者

(Charles C *et al*, 1999¹⁾ より改変引用)

ために、Three talk modelによるアプローチが注目されている²⁾。このモデルは、①チームトーク、②オプショントーク、③ディシジョントークからなる(図①)。チームトークは診断が明らかになった時点で、患者の価値観や選好が治療の決定に重要なことを確認するための話し合いであり、患者がどのように方針を決定したいか(自分で決めたい、一緒に考えたい、医療者に決めてほしい)を確認する。このトークは最も重要であるが、最もむずかしいプロセスである。一般に患者が診断を受けた時点では、現実を冷静に受け入れ治療方針の決定を判断できる状態にはないため、この時点で治療の決定を強要しないことが重要である。信頼関係が構築できるように患者の反応を確認し、考えや思いをしっかりと汲み取り、患者が迷っている場合は決定の保留や延期を提案する。われわれ医療者は早く治療を開始したいと考えがちであるため、患者を置き去りにせずしっかりと待つ姿勢が求められる。また、患者が多く意見を聞けるという点だけでなく、患者の思いや考えをいろんな角度で受け取るためにも、医師だけでなく多職種による介入も重要であり、このプロセスがうまく行けば患者を中心とした強固な治療チームを形成することができる。

患者との関係性が構築できれば、つぎはオプション

トークである。オプショントークは治療の選択肢(オプション)を説明し、患者の理解度を確認するとともに、決定を支援するプロセスである。疾患や治療へのイメージや考え方、理解度を確認した後、具体的に治療の選択枝を併記・説明し、それぞれの治療のリスク・ベネフィットを伝える。最終的に患者にとってベストな治療法を決定するために、オプショントークも非常に重要なプロセスである。患者が治療法を選択するにあたり自身の考えをまとめるために、「決定支援ツール」の使用が役立つ。「オタワ意思決定ガイド」が有名であるが、これは各治療法の長所・短所をまとめたり、周囲の支援者の意見などを記載し、複雑な問題を単純化し考えをまとめるツールである。また、実際に患者の理解度を確認するために、ティーチバックという手法が有用である。これは医療者が患者に説明し、患者自身の言葉で自身の理解を医療者に伝えてもらう手法である。患者の選択がどのように患者の生活に影響を及ぼすかについて、自身の言葉で表現できることは、理解度を測るうえで非常に役立つ。

オプショントークで患者の理解度が確認できれば、最後にディシジョントークになる。患者に最も大切なポイントを改めて確認し、オプショントークで出てきた治療の選択枝を深く吟味し、理解し、最

会員限定コンテンツのため、med パス会員にご登録、
またはログインが必要になります。

